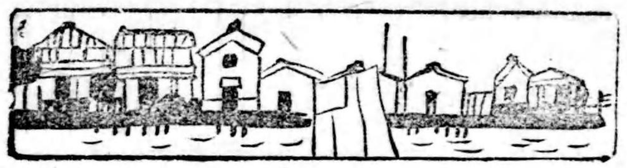
なると、偏執な氣質がムラ〳〵と起つて……『今更こうして濟ましたんだもの今になつて妾が殺したと云はれやうか、矢張り止しにしやう……』と云つて止めて仕舞うのであつた。お辯は人が黑いと云ふと白いと云ひたいし、人が泣くと自分は强いて涙を出さない、人が可笑しいと笑うと、自分は怒つて見たいと云ふ妙な氣質があるのであつた。然し今日此頃はその樣は執物なお辯も强度の神經衰弱に陷つてゲッソリと痩せ衰へて仕舞つたのである……

親子の悶

今日も工合が宜くないと云つて床の上へ寢て居る。そこへ靜かに這入つて來たのがお久である。藤作が拘引されて以來毎日泣いて居るの



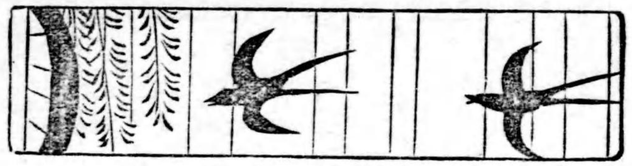
で、兩の目は妙に腫れて居る、不精に髮は取りあげないので急に年三つ四つ老けて見える。力のない聲で『阿母さん加減は……』

『お久かい矢張り同じだよ……』お久はその邊に散らばつて居る所を片附けて『少し足を擦りませう』

『あゝ氣の毒だね……それでは少し恃むよ』お久は母の足元に寄り添つて靜かに擦り初めた、兩人とも無言で居る。やがてお久は思ひ出した樣に『阿母さん！』

『えゝ』

『アノここの家へはもう誰れも來ないし……それに植木の方も荒れ放體になつて仕舞うし、これから後妾達はどうなるんでせうか……いつそこゝの所は引越して仕舞ひませんか…、妾もうこの土地に居るのは



どの位切つないか知れないんですもの…』お久は感慨に堪えられぬらしい。全く庚申塚のお綱を殺した以來、唯れとてこの家を訪問するものもなく、表を通つても知れる人は顔を横にしてさけて居る。廣い天地はたゞこの二人きり、もう孤獨の苦痛に堪へないのだ、『どつかへ行きたいがね…藤作の極りがついてから……アノ引越し仕樣、知ら無い遠い他國へでも行つたら又何とかなるとも思ふんだが……どうも身體の工合が、宜くないんだから……お前今少し辛抱して居てお呉れ』

『えゝそれも左樣ね……』又々無言になる……、親と子が別々に思ひに沈めば樂しかるべき對話も甚だしくと切れ勝ちになるのであつた。その内に夜はだん〳〵に更け行き、花園―藤作を失つた荒廢の園からは寂しい音を立てゝ蟲が鳴くのであつた。『お久やさあ寢ると仕樣―

仕方が無いから……』

『えゝ阿母さんほんとに寂しいわね…』

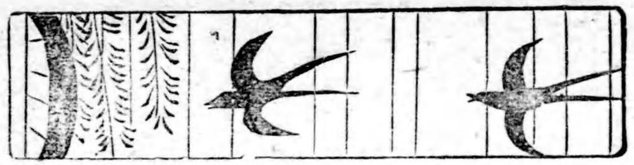
『氣の精だよ、サア早くお休み……』

『それぢやこゝへ水を置きましたよ……ア、もう寐やう、妾もう寐て考へるより外にもう法はないんだよ……』力無げに寐道具を出して寐る……然し彼件以來、臥床に入りても安眠は出來ない……たゞ身體を布團の上に横へると云ふに過ぎ無いのである……お久はこの頃宵の口は一寸眠られるが、眞夜中になると眠が冴えて少しも眠られない、一月以來全く不眠症にかゝつたのであつた。『オヤツ、今夜も又眠られ無いのか知らん』……枕をもたげて母を窺へばお辨のみスヤ〳〵と眠つて居るが、少さい鼾聲が溜息と共にきこえる、夜はだん〳〵に更け

行くらしい。彼方の花園から鳴く蟲が一しきり高くきこえり、……折り柄、今迄眠つて居たお辨がムツトと起き直り『えゝ勘忍してお呉れッ……ア、苦、苦るしい…藤作や……お綱さんッ……』と凄い高い聲で連呼する、お久は物恐ろしさに、布團を頭から引被るのである…如何に布團を被つても凄い叫びのきこゆるに恐々乍、『阿母さんッ……阿母さんッ』と注意する、もうこれが連夜同じ様に繰返されるので、少しも安まることは無いのである、お久は夕方になると共に夜の苦痛を感ずる様になつた、日が西に沈む頃となると、もう寂しい氣がして堪ら無い、結ぶべき夢路もなく、たま〳〵に見る夢とてはお綱の血に漬る物凄き様子が、さも無ければ藤作の死刑に處せらるゝ事である。もう一日増しにわが身の痩せ行く様に思はる『お母さんは何と云ふ情

け無いことをして呉れんたんだらうか…自分でお綱さんを殺ろして置いて兄様を身代りに罪をおとして仕舞うなんて、どうしてあんなに情け無い心になるんでせう……おゝ想ひ出す、お綱さんが肩先を抑へ乍逃ける。それを御母さんが後から追ひかける…もう今思つても身震ひする……いつそお役所へ訴へて出やうかしらん。左様すれば兄様は助るが御母さんが殺されて仕舞うし……あゝどうしやうかしらん』……と極まつた様なことを考へて居ると夜が明けて、世間がやつと賑やかになるので…ホツト安心の溜息を吐くのである。お久が日増しにやせて行くのも無理ないことではないか……。

良心の苛責



お綱は藤作が拘引されてから、土地の人がみんなこの一家のものにつれなく當るので、急にお久にやさしくする樣になつた。これを見てお久もかへつて情け無い樣に思つた。……御母さんも情けないことをして呉れたが、この頃はもうスッカリあの事を後悔して居るらしい……惡いたつて左樣惡い方なんじやあ無いんだから……たゞひよつとあゝ云ふ氣になつたに相違ない……えゝそれに違ひない……この頃はまるで生れ變つた樣になつたもの……ほんとに氣の毒になつて仕舞うわよ……』とこう母のことをいじらしく思ふのである。お辨も……藤作に與へた愛をさへ、この頃のお久の一身にあつめるのであつた。その上この頃は病氣にかゝつたので一層やさしくなつた。『お久や……スッカリ庭が荒れてしまつたねえ、藤作が居なくなつてまだ一月しら經た

無いんだか……』

『ほんとよ……植木もだい無しになつたので……さぞ兄いさんをまつて居るでせう……然し兄い樣はもう歸つて來つこはなし、ほんとに情けないわね……』

『あゝもうその話は止めにしませう……それにねお久や……妾ことによると今度の病氣を治らない樣な氣がするんだよ……もしも妾が亡くなつて仕舞へば、藤作はあゝなつて仕舞つたし、不自由のお前がどうなるかと思ひ出されてね……もう妙に悲しくなつてくるんだよ……』

涙に暮れる。……『大丈夫よ……御母さん……だから早く治つて下さいよ……御兄いさんに別れ、その上又御母さんにでも亡くなられたら、それこそどうして宜いか分らなくなつて仕舞うんだから……どうか藥

を呑んで今一度直るやうにして下さいよ……』

『左様思ふけれど、兄いさんは家へ歸つてくるよ……近い内に歸つて來るやうな氣がするんだよ……だからお前は萬一、妾が居なくなつても氣を丈夫にして居てお呉れよ……人間は老少不定つてえことがあるから、妾はもう生き過ぎた位なんだよ……それに毎晩々々いやな夢を見るんでね……此頃はもうスツカリ痩せちまつた樣な氣がするんだよ……ねえお久、お前はよく氣を付いてね、兄いさんと仲よく暮らしておくれよ……そしてもしも御母さんが病氣で死んだなら……たまには思ひ出してくれるんだよ……ねえお久や』

『お繼母さんそんな緣儀でも無いことを云はないでお呉れよ……それでなくつてさへ妾悲しくなるんですもの……』親子はシミ〳〵と語り

合うのである、お久はいつも負けん氣のお辨が、今日に限つてなぜこう弱い悲しいことをいふのであらうかと思つたが、これも毎夜の夢やあのお綱さんのことを思ひ出してこうなつたんだらう』と考へるのであつた。『お久やお前なんども濟まないが、今日も又お藥を貰つて來てお呉れな……足が不自由なのに氣の毒だけれどね……』

『え行つて來るわよ何わけは無いんだよ……』とお久はこの頃亂れ勝なる髪の毛を手早く取り繕ひ『それではお繼母さん行つて來ますよ……お醫者さんには何とか云ふんですか……』

『左樣ね、もし聽いたらアノよく眠れるやうなお藥を調合して頂くやうに云つて見て下さいよ』

『えゝ左樣お願して見ませう……』お久は藥瓶を下げて家を立ち出で

た……』後姿を見送つてお辨は……『兄姉とも兩人乍、どうしてあゝよく生れたんだらうか……妾に似たら邪見でありさうなものを……ほんとに何の因果……なんだらうか……藤作もお久も勘忍してお呉れッ……』と聲をあげて泣き崩れるのであつた、お辨は時とするとそれは人並外れて殊勝な心持ちになるのである。

毒藥自殺

お辨はお久を藥取りに出した後で直ぐと硯と紙とを出して、何事か書き認めた、筆持つ手の妙に振へた。そは病氣の故か、それとも何の理由か三十分許りで書き認めると共に之をわが着て居る襟の中に縫ひこんで。お辨はいろ〳〵と苦悶したのであつたが、究極する所は死：

より外に手段は無い……死んで作藤を救はんより外に採るべき道はないのであつた、毎夜のやうに見る夢……藤作や、お綱や、將お吉が、お辯の罪惡を責めるのでもう到底絶へられなくなつた、そこで自殺—と考へたが、どうしても藤作の罪を救はねばならぬ務めがあつた、そこで今日お久を藥取りに行かしめた後巨細にわが罪惡自白の書置を認めたのであつた。そして溫室内に入つた、害蟲驅除用に使用する青酸加里……それを手早く二塊ほど携へて枕元に置いた。そして布團の上にキチンと坐はり直し、『アゝお綱さん…どうか勘忍して下さい……妾もう罪を亡ぼすために、自殺して死んでしまひます！あの蟲…害蟲……木の中へ嚙み込んだ蟲もコロリと死ぬこの毒藥……これは妾の生命を取るには尤もよいものだと思ふんです……お辯は今恐ろしい毒藥を

のんで死んで仕舞ひます…だからお前さんを殺したことはどうか斷念めて下さいッ…藤作やお久はさぞ嘆くでせう…こんな鬼見たいな、蛇見たいな執念深い女でも、親といふ名に免じて、泣いて呉れるだらう…もう妾それで澤山…お前なんかゞ泣いてくれる涙、それで妾はもう滿足するんだよ…妾が無い後でどうか兄妹仲よく暮らしておくれよ…さらばです…』四角い薄白い毒藥は掌の上に載せられた。暫時瞑目してありしが、軈て蒼白く變はつた口元へ持ち運ばれた。『さゝ之を呑めばもうそれでお終ひだ…考へると妾の一生はいろ〳〵なことがあつた、散々に荒れ散らしたもんだつた…もうこんな世の中には何にも思ひ置くことは無い！五十年の一生考へると長い〳〵い夢だつたね…ねゝこれがこの世にわかれる境か、ドレ住み

なれた家の中のものでも觀て置かう…ジット見詰めて居たが…さらば！と一口に嚥下した…終焉…悲慘なる人間の終局それは例令善人であらうが、また惡人であらうが、少しも違ひ無い、死の神の手は社會の人の誰れでも攫つて行く……澤山の山と積んだ中から、いたづらの小僧が手を出して奪ひ去る樣なものである…いくら嘆いていやがつても仕方が無い、まして自ら死に行くお辯は寧ろ平氣で死についたのであつた。お久は斯ることのあつたことを知ら無い、醫者の所から藥を貰つて急いでわが家へ歸る途中、かの武田判事を先に二三人のものが、傳公を先に立てゝ此方をさして來たのであつた。傳公はお久を見ると共に『オヤッ植木屋の姉さんが…ア、ビッコを曳いて來たぞ……』見ると判事、衣服こそ和服ながら、恐ろしい顔は見まが

う筈もない『ア、お役人……どこへ行くんだらう……』と思つて居る内に、この一團はわが家をさして行く樣である、まして其中には官服の巡査さへ交り居るに胸つぶるゝ思ひして、不自由の足を引きづつてわが家へ駈け込んだ、この時母は既に死ぬべく毒を仰いだが頻りに苦悶して居た。そばには最前の一行がそのまはりを取り卷いて居るのであつた。『ア、苦、苦るしい、水、水を……』武田判事はお辯を見て思ひ出したのは三十年前のわが戀の人、美代治であつた。『ヤツ……貴方は……』

『苦しい……どうか水、水を……お久ッ……』悶ゑ乍らこの集れる人に目を注いだが『オヤッ貴方は……武田さんッ……』

『オ、拙者は藤作の庚申塚の殺人罪の係り判事、武田壽郎です……お

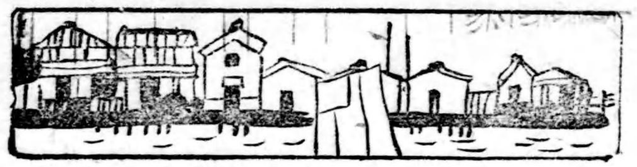
前を取調べに參つたッ……』お辯は苦悶の中にやうゝ……『妾を取調……もう死、死にます……藤、藤作を……』兩眼から血が滲んだ……口中からはゲッと血を吐いた！』

『ヤ、毒殺ッ……』一同はこの最後の苦悶を凝視するとき、お辯は頻りに其襟を指さし乍ら、遂にウーム、ウームと苦しげな叫びをその最後として其場に倒れた。

襟の中の書置

『オ、毒藥自害したらしい、襟を見よ仔細あらん』と云ふ判事の命に急いで其襟を開いた、中から出でたのは白紙にかいた、一通の書き置きであつた。

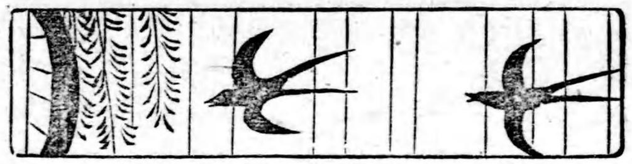
『手紙を以てこの世に申し殘し置き候、妾は世にも恐ろしい大罪を犯した事にて候、お綱を犯したるは別人に無之、全く妾の所爲にて候妾はお綱の母のためにわが戀しき人をとりさられたるにて候、この時いかに無念であつたか、そは妾より外に知る人はこれなかるべく、妾は三十年の間、口惜し口惜しの思ひは日として思はぬことはなかりしわけにて候へしを、今度急にそのお綱がわが家に住む樣になりわが子藤作と仲睦じきを見て、昔の恨はムラ〳〵と起りて絶へかねて火事の夜、之を殺す心となりてかの樣に慘殺いたしたるにて候、然るに其のためわが子藤作が妾の罪を引受けて自ら下手人と相成り候ことまことにまことに心苦しく、その後は一夜として樂々眠られぬのにて候……妾は只今罪を自白致すべく又、そのお詫として



毒藥を服して相果て可申、ついては藤作は少しも罪なき潔白なるもの、何卒御調べの上お免し下されたく、いくへにもお願ひ申し置き候、なほ申し置きたきこと山々有之候ふも死を急ぎ候まゝ、こゝにて筆とめ置き申し候

係御役人樣　　お辯

筆に澁滯はあるが、意味はよく分つた、判事は『オ、犯人はお辯でありしか……イヤかく死んだ以上は致し方はない』とその苦悶の儘死んだ淺ましい顏をジツト見て居た『罪人ではあるが死んだ上はもう憎むべきではない、それにこの犯人が、藝者美代治の後身であつたとは初めて知つたイヤ人事は實に意外なものであるな……想ひ起せばこの



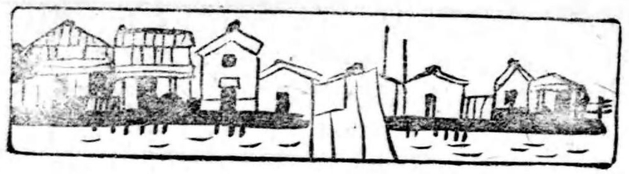
壽郎はこの女のために散々侮辱され、それが動機で今日の位置をえたのでたる、二十五年前、この手で自分を抱擁したならば余は今日あることは出來なかつたのだ、いはゞわがためには恩人――とも云ひゝら、自分は美代治に恨を報ひたいと思はぬことはなかつたが、お前は自分を同じ樣に戀の恨をその子に報ゆるといふ、復讐心が、斯る大罪を犯さしめたのである、あゝ戀――戀の產む結果は甚だ恐るべきものである……』と感慨に絕ねかねてか斯う述懷を語つた。お久は流石に女『えゝ阿母さん、ァア淺ましい姿になつたのです：えゝこれから後妾ど、どう致しませう、もし阿母さん……ッ』と其死體に取すがつて泣くのであつた、武田判事は徐に『イヤお前達兄妹が親に對する至情には私も實に同情する……そして兄藤作は早速放免致すから安

心致せッ……。個人としての武田壽郎はお前達兄妹に力を添へてやらう……それはお前の母が私をつれなくふり捨てゝ吳れた報恩だ、死者に對するわが寸志じや』

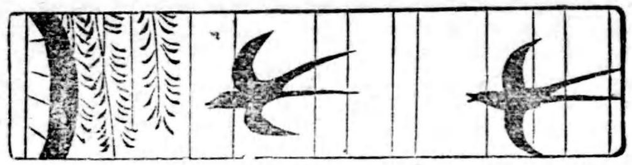
『ハイ有り難う存じます……』お久は小さい手を合せて拜んだ。折り柄かけ付けた素山『イヤどうも實に急變ッ：どうも意外の事でござつたの……然し藤作君の寃が晴れたことはこの素山中心から喜ぶのです……イヤ皆樣、早く藤作さんを放免さして下さいませ』と人事にはあらぬ樣に喜ぶのであつた、武田判事は一同を促して歸り去つた。時は九月十五日、美しい月は下界にかゝることの有るを知らぬ顏に、清い清い姿を雲間に現はして、荒廢した苔綠園の庭を照らすのであつた。

大團圓

囹圄の人……この位物寂しいものは無い。狹い暗い室の中に押込められては唯ものを思ふより外には無い。さらぬだに世は秋となつて憂ひある人の心を一層寂しくさせるのである。『ア、寂しい』と時々溜息を吐くそして想ひ出すのはお綱のことであつた。母のことであつた。斯く二人のことを考へて居ると思ひつかれか、その儘眠つて仕舞つた。スルト母のお辯が鎌をふりかざして、お綱を追ひ掛ける。お綱は帛をさく樣な聲を立て『アレーッ、アレーッ』と云ひ乍ら逃げる。お辯は血相をかへて『ヤイ逃げ樣たつて逃がすかッ……貴樣には怨があるんだ』と追ひ掛ける。お綱は泣き乍ら『藤作さんッ……おばさんが……どうか助けて下さいッ』と呼はるので藤作は驀然に母を追ひ



駈け『お阿母さんッ何をするんです……危險いッ……お母さんッ……ところれ又追ひ掛ける、お辯は『藤作お前にも怨みが有るんだ、サヌ二人とも助けて置くことは出來ないぞ覺悟しろッ……』と宛然夜叉の姿となつて追ひ掛ける。『サアお綱さんッ逃げなさいッ……私の背中におぶさるんですッ……』と手早くお綱を背負ひて逃げる。時々後をふり返り見れば母のお辯の姿の恐ろしさ！顏は青く、髪を後にふり亂し耳元まで裂けし口からは眞紅の舌を出せる形相のもの恐ろしさに、後をも見ず一散に走り行けば、前には大きな川がある、もはや逃るべき場所も無ければ最早これ迄と身を躍らしてザンブと河中に飛び込む、これを見たるお辯も續いて身をおどらしてとび込んだ、水はだん〳〵にわが口に入る。お綱も母も悲鳴をあげて救ひを求めた、藤作は片脇にお綱を、



片脇に母を抱へて岸に上れば、悲しや二人とも息切れて最早呼べども答へない『お阿母さんッ……お綱さんッ……』と交互に呼ばうとすると、そは藤作が獄舎の中で見た一場の夢であつた。思ひつかれて見し夢であつたのだ。……罪なくして罪を自白せる藤作は、いく度かなげき悲しんだか知れぬ『ア、お綱さんどうか宥して下さい……お母さんが……お母さんが貴方の様な方を、殺、殺ろすなんて、乞度悪魔がみ入つたのでせう……さぞ怨めしい母だとお思ひでせう……どうか勘忍して下さい、私はいづれ母の罪を引受けて死なねばなりません、死んでお詫致します……えお綱さんッ……』と人無き時は聲をあげて泣き叫ぶのであつた。それから又家の事を考へ出しては『阿母さんどうかもし私が殺されたなら……お綱さんや、私の後を弔つて下

さいませ……それ丈けはよつくお願ひして置きます……、お久はどうかお母さんに孝行をする様に……』と斯う同じことを繰返しては云ふのであつた。もうどうせ死刑になるものと覺悟はして居ても時々は愚痴をこぼすのであつた。スルト……丁度九月の十三日、呼出しがあつた。今日は公判の日だと考へて居るので『アー今日は何んと嘆いても悲しんでも公判のある筈だ……モウ仕方がない……』と覺悟をした。いつも恐ろしく思はるゝ武田判事の顔が、今日は一層恐ろしく見ゆる、……あの口からわが命をとるべき最後の申渡しがあるのであらうか……殺人犯人として『死刑』を宣告されるのであらう。と思ふと立つて居るわが身體が妙にブル〳〵と震へる。軈て落付いた口調で判事武田壽郎は『永田藤作……本日申渡すべき件があつて出廷を命じ

た。其方庚申塚に於てお綱を殺したりとの自白は、全く根據なき陳述と認むる、他に眞の罪人の出でたる以上、其方は當然無罪たるべきものである……立てい……』と意外の申し渡しで一同退廷した。藤作はことの意外に驚かぬわけには行かぬ。暫くは茫然として佇めるを役人に促されて法廷を出た。それから馬車で監獄へ行くと、看守は翌日いろ〳〵と申渡しをして其夕からは急に取扱が一變した。藤作は夢中である、そして今日は罪人扱された昨日の監倉内とは異なつて拘留所の明るい場所へうつされる。看守や押丁の取扱振りが目立つて違ふ『どうも分らない事になつた、……眞の罪人が出た以上は……』と確に申渡されたやうであつたが……お綱さんを殺したのはわが母より外には無い、スルとお母さんが良心の苛責によつて自白したのであらう

か……イヤ〳〵あの樣な片意地の阿母さんがその樣なことをする筈はない……どうしたのであらうか……もう阿母さんが自白したらどうしやう……、折角自分が罪を負つたことが無駄になつて仕舞つたのかしらん、お母さんは自分と同じ樣に冷い、暗いそして陰氣な所へ閉ぢ込められて、その果ては斷頭臺の露と消えてしまはねばならない……いくら罪を犯したにしても氣の毒で……今一度押し切つて、お綱さんを殺したのは私ですぞと申し出て見やうかしらん』……また心配の種が增したのである、藤作を見廻りに來た看守にその理由をきいたが、一向要領を得ない。藤作は一夜を悶え〳〵て明した。夜が明けると看守長から『藤作、其方は係り刑事より無罪を申し渡され、今日青天白日の身となつた、其方の家へは其向きの話を通じ置いたので今朝

は迎ひのものが來る筈、永らく困難いたしたであらうな』と平常とは打つて變はつた態度に嬉れしいやうな、又悲しいやうな妙な感じが湧き來るのであつた。六十日ぶりに監獄の門を出ると、先づ目についたのが、かの向ひに住へる素山、藤作の姿を見るや否や、其側にかけ寄り『オ、藤作さんッ、私は最前から迎へに來て居たんだよ、マア無事で何より……』親身も及ばぬ親切に、藤作も初めて明るい世の中に出た様な抑へ切れない嬉れしさと共に思はず涙が湧き出たのであつた。思はず走りよつて『オ、素山さんか……私何が何んだかもう分らないのです……どうか理由を話して下さいッ お阿母さんは……』と疊掛けてきいた。素山は例の形容澤山の會話でお辯の自殺から有りしことがらを落なく語つた。

『エ、それではお阿母さんはあの自殺……あの自殺ッ……』

『左様です、毒殺して果てました……。』藤作は『ア、何と云ふ情けないことを……ア、もう皆な左様いふ運命なんッ……何と云つた所が今はもう後の祭……これも仕方が無い』と思ひ諦らめてわが家に歸つた。家に歸ると一番先にかけ出して藤作に走りついたのがお久……不自由の足を引づり乍ら『兄いさん……妾もう……』

『オ、お久ッ……』四つの眼からは涙が止め度なく湧き出づるのであつた。『お久ッ……もう泣くな。これからは親に別れ、戀人に別れた藤作はこの世には何の樂しみも無い……え、泣くなッ……寂しいこの世を二人で暮すことにしやう、……』

『全くよ……妾もう兄いさんより外には縁りにする人が無いんですか

ら・・・・』荒れ果てた花園にはコスモスの白い花が憂愁の人の心も知らぬ顔に咲いて居るのであつた。

（二）

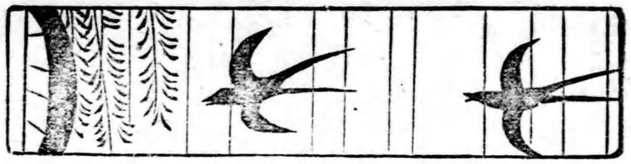
母にわかれ、戀人にわかれし藤作はこの世に其心をなぐさむべきことは何も無い、丁度秋の空のもの寂しい樣に不具の妹と二人して荒れ果てた花の手入をして居た。或る日この苔綠園を訪づれたのがかの武田壽郎、今日は和服姿に笑顔をさへ口元に湛へて居る。藤作はどうしてこの人の顔が忘られ樣『オ、貴方は判事の・・・』

『イヤ藤作君、今日は判事じや無い・・・。個人の武田壽郎です・・・少しお話しゝたい事があつての・・』

『左樣ですか、前日はいろ〳〵と有り難うございました、サアどうぞ

此方へ・・・』奥の座敷へ案内しつ。お久が入來りし番茶に口を沾し、

『さて藤作君、君が子としての立派な行ひには俺も實に敬服した。親のために自ら殺人罪を引受ける・・・こりやなか〳〵出來んことじや。壽郎も實に其心に感心いたした。そこで今日は御相談に上つたのじやが・・・といふのは僕はな理由があつて生涯婦人と絶縁した。卽ち生涯妻を迎へんのじや・・・然しもう五十七歳・・・これから女を迎へると云ふのはわが主義に反する・・・と云つて、この武田家を絶やして仕舞ふと云ふことは祖先に對して出來ん、出來んによつてたれか養子をと心掛けていろ〳〵探して居たが、なか〳〵思ふ樣な養子が無い、そこで今日は卒然乍ら、お妹のお久さんを貰ひたいと考へたので、・・・それで上つたのだが、どうだらう聽き入れてくれまいか・・・』藤作は意外



なる武田壽郎の懇望に夢かと許りに喜んで。『あの貴所の養女にお久をッ……』

『ハイ是非相願ひたいので……』

『御覽の通り足が……片端で、それに母は人殺し……でもう貴所方の樣な身分ある方へは……』

『イヤ親が人を殺したから、その子が惡いとは申されぬもの……殊に私が今日の位置をえたのは貴方のお阿母さん……前名美代治と云つた頃、私に愛想をつかしてくれた許りに私は今日の位置をえた。云はゞ貴方のお母さんは私に對する恩人……私はその後奮勵して今日の位置をえました。親族や友達はいろ〳〵と私に妻を迎へる樣に申しましたが……私は其後女と云ふものが厭になつたのです……然しだん〳〵歳

も老りますし、それやこれやで是非お貰ひ申したい……これは俺がお前さん達のお母さんに對する寸志じや、是非引受けて頂きたい』藤作は嬉れしさと、武田判事の寛大な心中に感謝した。『イヤ左樣でございますか、有難う存じます、お久もさぞ喜びませう、私から厚くお禮申して置きます。』

『イヤ禮を云はれる程のことも無い……それに餘り失禮ではあるが、苔綠園經營者としては君の腕前は充分であらうが、その經營資本……こりやいくらでも多い方が宜からうと考へるので、俺もお久さんを貰う以上は君の親族だ……親族が互に助け合ふのは當然の事と思ふ……物は相談だが俺は今こゝに遊んで居る金が五千圓程ある……、それでこの金を君に提供する、提供するから……それで一つこの事業の發展

を計つて貰ひたいのだが』藤作は武田壽郎の意外の言葉に涙のいづる程嬉れしかつた。お久はあの様な片端到底人の許に嫁しづけ様とも思はない、まして人殺しの娘、一生薄命に泣かねばなるまいかと思つて居た所へ、是非貰ひたいと壽郎の懇望その上、資本も實はお綱の家の叔父さんから出して貰つて居た所が、今度の變事があつたので資本の途は全く絶えてしまつたので、この末どう云ふ風に經營しやうかと考へて居た矢先とて、その喜びはたとへ様が無い『イヤ〳〵重ね〴〵私、共兄弟の身の上を心配して下さつて、こんな嬉れしいことはございません』と涙を流して喜ぶのであつた。そこで壽郎を待たして置いて、お久に壽郎の話を通ずると『兄いさん、ホントでせうか、妾もう何だか夢のやうで……』と嬉れしさが包み切れないのであつた、そこで

改めて壽郎に承諾の意味を返事する、武田壽郎も喜んでこゝを去つた。二三日經つて、自働車は苔綠園の前に止まつた、暫らくして盛裝したお久は自働車上の人となつた。……苔綠園は植木の數も殖えて業務は日に月に進歩して行くのであつた。十日に一度位づゝ壽郎の姿を花園に見受けるやうになつた。お辯が死んでから百日目にお辯やお綱の霊をなぐさむべき法事はとり行はれた。その集つた人のうちには武田壽郎も、それから見違える程立派になつたお久も……馬鹿の傳公も見えた。……その後素山は藤作に宜い嫁があるからと云つて口を酸くして貰ふ様に說いたが……藤作はつひに妻を迎へない。

あざみ草終

大正八年十二月三十日印刷
大正九年一月五日發行

編輯所　柳文庫編輯部
編輯兼發行者　東京市淺草區三好町七番地　大川錠吉
印刷者　東京市淺草區南元町廿四番地　小宮定吉
印刷所　同所　大川屋印刷所

（やなぎ文庫）
不許複製

定價金三十五錢

發行所　東京市淺草區三好町七番地　大川屋書店
（電話下谷一五七三番、振替東京四〇〇九番）

MADE IN JAPAN.

L77
1189

終